

存在の窮極として自然的存在はそれに包まれそれに依據
聯關して考へられる事に由り自然學は第一哲學に密接に
聯關して考へられるのである。

(附記) 原典名は便宜上、下の如き略稱を用ひた。形而
上學 (Metaphysica) / 自然原論 (Physica) / 宇宙論
(De Caelo) / 生成論 (De Generatione et Corruptione) / 氣象論 (Meteorologica) / 動物體論 (De Partibus Animalium) / 動物生成論 (De Generatione Animalium) / 心理論 (De Anima) / 後分析論 (Analytica Posteriora)

尙譯語に關して *physis* は「自然」乃至「本性」或は「本性自然」と譯し *kosmos* は大方は「言葉」と譯し時に假に「存在論理」となし *kinēsis* は「動」乃至「運動」と譯した。これは本文にも言及せる如く場所的運動 *dogma* より遙か廣義である。これらの譯語に關して論ずる事は此處には暫く措く。

アリストテレスのフェシスに就いて

受贈・交換雜誌

- 哲學研究 (第二號)
- 國語・國文 (十五ノ十二、十六ノ一、二、三)
- 一橋論叢 (十七ノ一、二)
- 文學研究 (第二十五輯)
- 哲學季刊 (第四號)

前 號 目 次

- 美の批判 (承前) : 文學博士 植田壽藏
- 内證傳達の様式 : 文學博士 石津照隲
— 天臺教相論の歸緯 —
- 社會法の性格 : 法學士 磯村 哲
— 近代民法と社會法 —